

氏名	李文鎬
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 7610 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	戦後日本作家による北朝鮮表象の研究 —1960 年代から 2000 年代を中心に—

主査	筑波大学 教授	博士（文学）	青柳 悦子
副査	筑波大学 准教授	博士（文学）	齋藤 一
副査	筑波大学 准教授	博士（文学）	吉原 ゆかり
副査	愛媛大学 教授	博士（文学）	中根 隆行

論文の要旨

本論文は、太平洋戦争後、特に 1960 年代から 2000 年代の時期に、日本において執筆活動をおこなった作家たちによる北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国、以下北朝鮮と略する）を題材とした小説や訪問記を、それぞれのテキストが書かれた時代背景との関係から読みなおし、大きく揺れ動いてきた北朝鮮表象を析出することで、戦後の日本社会にとって北朝鮮はどのような意味を持っていたのかを検討するための視座を提示するものである。

構成は以下のとおりである。

序章

第 1 章 帰国事業における「楽園」幻想への疑念——金達寿「日本人妻」論

第 2 章 弱き詩人と北朝鮮——松本清張『北の詩人』論

第 3 章 人々の表象（不）可能性——小田実『私と北朝鮮』と『「北朝鮮」の人びと』論

第 4 章 消費の対象としての北朝鮮——伊藤輝夫『お笑い北朝鮮』論

第 5 章 過去と他者の消失——村上龍『半島を出よ』論

結章

序章で本論文の背景と目的を説明し、本論文にとって関わりの深い先行研究を批判的に紹介したあと、第 1 章では、9 万人以上の人々が北朝鮮に帰国した、いわゆる帰国事業（1959 年～1984 年）の最盛期である 1950 年代後半から 1960 年代初期を背景とした、金達寿による短編小説「日本に残す登録証」（1959 年）と「日本人妻」（1961 年）をとりあげ、特に後者について詳しく分析する。これらの作品は、帰国事業と関連して流布された、北朝鮮についての幻想をナイーブにとらえた作品であると論じられており、実際に金はマスメディアにおいては帰国事業を宣伝し、北朝鮮が「楽園」であるという言説を

広めていたが、金の文学作品はこうしたプロパガンダとは相当異なることを示す。「日本に残す登録証」については、密入国者として日本で不安に満ちた生活を送った呉青年が、北朝鮮への帰国を前にして、日本社会を強く批判するのではなく、「よい思い出」もあったことを語るという、曖昧な態度を示していることを指摘する。「日本人妻」については、朝鮮人男性を夫とする日本人妻、加原芳江が帰国できずにいる様を描いた作品であるが、本章では、芳江が北朝鮮「楽園」言説を肯定しつつも疑念も示していること、そして北朝鮮「楽園」言説を鵜呑みにする夫や息子の様子を見て、複雑な意味を込めて「さびしい」と漏らしていることを指摘することで、この作品が単なるプロパガンダではないことを、テキストの詳細な分析によって示す。

第2章では、松本清張の『北の詩人』（1964年）と雑誌連載時のテキストを研究対象として、北朝鮮が資料を開示しないため朝鮮戦争の真相が掴めないと考える松本が、歴史に翻弄された人々、特に詩人の林和に焦点をあて、真相の解明を試みていることに注目する。雑誌連載時、松本は林和の叙情的な詩や政治的な詩を4編引用するなど、彼の活動の多面性を強調したが、単行本では3編の詩を削除して林和像を単純化し、さらには作品最後の、林和を裁く北朝鮮の軍事法廷の場面に加筆して、法廷において呆然と佇む非理性的な「弱き詩人」林和の様子をフィクションとして表現することで、北朝鮮を世界に対して内部の真相を伝えない閉鎖的空間として表象していることを論ずる。

第3章では、小田実による北朝鮮訪問記である『私と朝鮮』（1977年）と『「北朝鮮」の人びと』（1978年）を分析する。まず、大国に対抗して主体思想のもとに国家建設を進める北朝鮮を肯定的にとらえていた小田が、北朝鮮を実際に見聞せずに論評する、いわゆる北朝鮮通たちの報道を批判していたことを示す。さらに、北朝鮮訪問時の小田が、主体思想の実践を観察し記録するためにおこなった、一般人への事前連絡なしの訪問が、実際には北朝鮮政府によって調整されたものだったこと、そしてそのことを小田自身も理解していたにもかかわらず、問題の重要性を突き詰めて考察しなかったことを指摘し、小田による北朝鮮表象には限界があったことを論ずる。

第4章では、伊藤輝夫の『お笑い北朝鮮』（1993年）をとりあげ、冷戦崩壊後の社会主義や共産主義の退潮の中で、1990年代初頭の日本では北朝鮮を日常的な娯楽の素材としてとらえようとする新しい潮流が生じてきたことを論ずる。まず、この作品の重要な先行研究である荻野アンナの論考から、「愚直さ」と「ナナメに受け取る」という対照的な二つの概念を借用し、『お笑い北朝鮮』やこの作品に前後する北朝鮮関連書や記事における北朝鮮への語り方を論ずる。具体的にいえば、ジャーナリストや北朝鮮専門家たちも、そして伊藤自身も、北朝鮮という対象と時間をかけて冷静に向き合う、つまり北朝鮮に対して「愚直」に向き合うのではなく、前者が北朝鮮に対する評価やイメージをただ「ストレート」に述べる傾向があったこと、そして後者は北朝鮮に関する事実を真正面からとらえることを避け、「ナナメに受け取る」ことで、北朝鮮を揶揄や笑いの対象として表象していたことを明らかにする。さらに、こうした北朝鮮に対する伊藤の北朝鮮表象が、数多くの軍事シミュレーション小説の氾濫といった、消費される北朝鮮表象のきっかけの一つともなったことを示す。

第5章では、村上龍『半島を出よ』（2005年）をとりあげる。『半島を出よ』の先行研究でもっとも重要視されている「北朝鮮兵士の視点」という問題を念頭におきつつ、かつての日本の侵略や植民地政策の被害者であるという北朝鮮兵士たちの持つ歴史認識が、彼らと出会った日本人の歴史認識に変化をもたらす可能性があったものの、結局は日本人こそが被害者であることが強調され、日本における定型化した北朝鮮表象や言説が解体されることはなかったことを論ずる。

結章では、この論文の成果を振り返りながら、5人の戦後日本作家による北朝鮮表象が、常に確固たる

一つの「北朝鮮」を指し示すことがない多様なものであったこと、そして北朝鮮表象は、完全な成功を遂げることなく常に失敗におわるが、戦後日本にとって自己認識と時代認識の試金石であり、これからもそうであろうことを論ずる。

審査の要旨

1 批評

日本における北朝鮮表象に関する先行研究はすでに複数存在するが、それらは1960年代から2000年代という長い期間に発表された多様なテキストを包括的に取り上げたものではない。これに対して本論文は5人の作家の作品を詳細に分析し、理想化された「楽園」、情報を外に発信しない謎としての空間、大国に対抗して自主独立を目指す国家、揶揄と笑いの対象、日本人を苦しめる加害者という、大きく揺れ動いてきた北朝鮮表象の変遷を包括的に提示している。この点において本論文は、戦後日本、さらには今後の日本における北朝鮮という存在の意味を考察するための一つの視点を提示するものであり、高い学術的な価値を認めることができる。

また、本論文の優れた点として、テキスト細部への目配りをあげることができる。第1章では、帰国事業と北朝鮮「楽園」言説のプロパガンダの一部として読まれてきた金達寿の作品の、プロパガンダとは言い切れない曖昧かつ批評的可能性に満ちた箇所を指摘している。第2章では、これまでの多くの『北の詩人』先行論では等閑視されてきた、連載時と単行本のテキストの違いに着目し、そこに松本の北朝鮮観の一端を読み取っている。第3章では、小田実の北朝鮮訪問記を精読している。そこでは、小田の北朝鮮滞在中の事前連絡無し的一般家庭訪問も北朝鮮政府の意向に沿ったものであることの証拠になる、短い重要な記述を見逃さずに論じている。こうしたテキストの重要な細部への注視は、本論文の文学研究としての価値を高めるものである。

付け加えるならば、第3章以降での北朝鮮通と言われる専門家たちや専門雑誌の出現についての情報提示、第4章および第5章でのサブカルチャーにおける北朝鮮表象への注視も、本論文における議論のさらなる発展の可能性を示している。

このように意欲的な論文ではあるが、議論の対象としたテキストの取捨選択の妥当性については十分な検討が尽くされているとは言い難い。また、各章の議論の一層の精密化も必要である。しかし、このような課題への取り組みは著者の今後の研鑽に託するところのものであり、論文全体としては十分に一貫した論旨が形成されていると判断できる。

2 最終試験

平成28年1月23日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。